

三浦半島の5000年前の遺跡から 出土した大型植物化石

顧問 大森 雄治

三浦半島では初となる縄文時代の丸木舟（長さ約3m、幅45cm）が1981年に横須賀市久里浜の伝福寺裏遺跡（久里浜港湾口部の南岸）から出土しました。丸木舟とともに多数の大型植物化石も出土したことで、花粉分析では検出が困難な属や種—クスノキ科のように花粉が分解されやすい植物や、虫媒花のように花粉の量が少ない花をもつ植物—を含む多くの植物が同定され、約5000年前、縄文時代前期末から中期初頭の植物化石群集が記録されました。

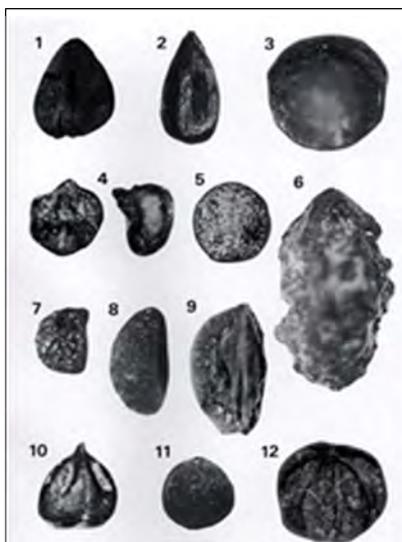
木材化石は、材の横断面（小口面）、接線断面（板目面）、放射断面（柁目面）のプレパラートを作成し、現生種と比較をして同定します。この遺跡からは39点の木材化石が出土し、イヌガヤ、モミ属、ネズミサシ属、オニグルミ、スダジイ、コナラ属コナラ節、コナラ属アカガシ亜属、ムクノキ、エノキ属、ケヤキ、タブノキ、ヒサカキ、ヤブツバキ、ハギ属ヤマハギ節、ムクロジ、ツタ、グミ属、ムラサキシキブ属の自然木、ムクノキの加工木（丸木舟）合計18分類群が見出されました（能城・大森, 1994）。いずれも現在の三浦半島で見られる樹種です。常緑樹が出土点数のほぼ3分の2を占め、とくにスダジイは現地に生育していたことを示す根材を含む11点と最多でした。以上のことから、遺跡周辺ではスダジイが優占する照葉樹林が成立していたと推定されました。ムクノキで作られた丸木舟は県内でも初めての記録で、全国的にも希少な例です。横須賀市自然・人文博物館に常時展示されています。

果実と種子では、クロマツ、カヤ、イヌガヤ、オニグルミ、イヌシデ、アサダ、コナラ属クスノギ節、コナラ属アカガシ亜属、ムクノキ、ケヤキ、ヤマグワ、ヤブツバキ、ヒサカキ属、サクラ属、アカメガシワ、ユズリハ属、カラスザンショウ、キハダ、カエデ属、モチノキ、ブドウ属、ノブドウ、キブシ、ミズキ、クマノミズキ、エゴノキ、クサギ、ニワトコ、ガマズミ属

ガマズミ節の29分類群、葉化石では、クスノギ、エノキ、ケヤキ、サクラ属の4分類群が見つかりました（大森・百原, 1995）。このうちアサダとキハダを除き、いずれも現在の三浦半島に普通に見られ、材化石の同定結果同様、遺跡周辺は照葉樹林や暖温帯落葉広葉樹林であったと推定されました。

現在アサダは丹沢東部と箱根山地、キハダは小仏、丹沢、箱根山地に分布し、三浦半島には分布していません（神奈川県植物誌調査会, 2018）。年平均気温が今より7~10℃低かった最終氷期の後に進行した温暖化は、約6500~5500年前には現在より2~3℃高くなってピークに達しました。寒冷期に分布していた様々な温帯落葉樹が温暖化とともに三浦半島から消えていく中で、アサダとキハダは温暖化のピークを過ぎたこの時期まで遺存していたと推定されました。5000年前以降の遺跡の発掘調査では、植物化石の記録がほとんどないので、これら2種が三浦半島から消失した時期は不明です。

この伝福寺裏遺跡から出土した植物化石群集の分析結果は、現在の三浦半島で見られる樹木の10分の1ほどの樹種を明らかにしたにすぎませんが、丸木舟の発見をきっかけに5000年前のこの地域の植物相や植生の一端を知ることとなりました。



横須賀市久里浜伝福寺裏遺跡から出土した果実・種子化石。

- 1, イヌシデ.
2, アサダ. 3, ムクノキ. 4, ケヤキ. 5, アカメガシワ. 6, ユズリハ属. 7, カラスザンショウ. 8, キハダ. 9, モチノキ. 10, ブドウ属. 11, クマノミズキ. 12, ミズキ.
スケールは5mm.